

# 新入生に おすすめする1冊



今回は幼稚園から大学の方々に、おすすめの絵本・書籍を紹介していただきました。ぜひお手に取ってみてください。

## あそぼうよ

作：レオ＝レオニ、好学社出版、2010年発行

幼稚園教諭 赤坂 洋子



きょうはなにしようか？

2匹のネズミは「おはよう！」から「おやすみなさい！」まで色々なことをして遊びます。「ほんよんでもいいし／おはなつんでもいいし／およぎにいてもいい」と、とにかく遊ぶのです。

この絵本は『スイミー』『あおくときいろちゃん』などで知られている絵本作家レオ＝レオニが、より年少者向けに作った一冊です。好きなことを存分に楽しんでいる2匹の姿が、色鮮やかなカラーで優しくも生き生きと描かれていて、まるで一緒に遊んでいるようなワクワク感を覚えます。

「〇〇してもいい」と言われたらきっと「あれもしたい、これもしたい！」と嬉しくなりますね。実は、青山学院幼稚園は「おはよう！」から「さようなら！」まで、そうやってたくさん遊ぶ場所です。新入園児の皆さん、保護者の皆さま、どうぞ「きょうはようちえんでなにしようか？」と楽しみにしていらしてください。そして「あれがしたい、これがしたい」と、先生たちに教えてくださいね。やりたいこと、好きなことを、いっぱい膨らませていきましょう！



## くすのきだんちへ おひっこし

作：武鹿 悦子、ひかりのくに出版、2008年発行

初等部 6年 大瀬 あさひ

このお話の主人公、かえるくんは、ある日「くすのきだんち」にやってきました。管理人のもぐらにすすめられ、部屋の中を見えます。そして、ここに引っ越そうか考えます。けれど、上の階と下の階にかえるくんの苦手な鳥がすんでいるから、「やっぱりだめだめ。」と言って帰ってしまいます。

かえるくんは階段を下りるのが面倒になり、手すりに飛び乗り滑っていきます。しかし勢いあまって、壁にぶつかってしまいました。そうして、そんなけがをしてしまったかえるくんを、くすのきだんちの住人ははげましてくれました。かえるくんが苦手な鳥のかけすはプリンを作ってくれました。くすのきだんちの住人のやさしさを知って、かえるくんはここに引っこすことを決めました。

かえるくんが鳥が苦手なように、みんなも苦手な人ができてしまうかもしれません。でもそれは自分が相手のことを知らないだけで、本当はとっても良い人かもしれません。勇気をだして、その人に歩みよってみてください。そうしたら、何か変わるかもしれません。新入生みなさん、この新しい生活で、すこし苦手な人ができた時、ぜひくすのきだんちのかえるくんを思い出してみてください。そして勇気をだしてみてもうどうでしょうか。



# そして、 バトンは渡された

作：瀬尾 まいこ、文藝春秋出版、2018年発行

中等部教諭 栗原 拓也



「愛とは、相手のことを大切にしたいと思う気持ちのことだ」

中等部時代に、初めてキリスト教に触れた私に、聖書の先生が教えてくれた言葉です。聖書には「愛」という言葉がよく出てきます。しかし、まだ中学生になりたてだった私にとって、「愛」は漠然としたものでした。「好き」や「恋」となりが違うのか、隣人を愛するとはどうすることか。この言葉を聞いてからは、聖書の言葉が、「愛」が、ずっと胸に入ってくるようになりました。新入生のみなさんにおすすめするのは、そんな「愛」をテーマにした作品です。

本作の主人公、優子は、名字が4回変わり5人の親がいる高校3年生。一見すると”不幸”な家庭環境のように思えますが、優子には一切悲壮感はありません。なぜなら、優子の5人の親はみな、時には奔放に、また時にはさりげなく、いろいろな形の「愛」を懸命に注ぎ続けたからです。そして、大切に大切に繋がれていった「愛のバトン」は優子の手に渡り、どうなっていくのか。物語を読みながら、そして中等部での3年間を過ごしながら、保護者の方々や先生方、神様からのたくさんの「愛」に触れ、「愛」について考え続けてくれたらと願っています。





## いまを生きるあなたへ 神に招かれて

作：安藤 理恵子、いのちのこば社出版、2020年発行

高等部3年 本間 誉

ご入学おめでとうございます。私が紹介するのは「いまを生きるあなたへ 神に招かれて」です。この本は、今を生きる若者に向けて書かれており、キリスト教学校で学ぶ私たち高等部生にぴったりの一冊です。筆者の安藤さんご自身が学生の時に感じたキリスト教や聖書に関する思いがありありと表現されており、聖書のこばをわかりやすく解説してくださっています。みなさんは今どんな心境で青山学院の門をくぐるのでしょうか。先行きの見えないこの時代の中で誰にも言えない思いや悩みを抱えたり、これからの人生について思考をめぐらしたりすることもあるかもしれません。安藤さんはこう語ります。「これからの人生は、神が造られた本来の自分を発見していく旅です。『私は、この私でよかった。』と思えるような深い満足と感謝に至る人生に導こうとしておられる神がいます。そう考えると、世界が違って見えてきませんか。」

青山学院高等部ならではの学びがこれからたくさんあると思います。聖書のこばを聞いて、ぜひこの3年間を実りのあるものにしてくださいね。



# はじめての ボンヘッファー

作：S.R. ヘインズ/L.B.ヘイル、教文館出版、2015年発行

大学宗教主任・文学部教授

シュー土戸 ポール

大学宗教主任・国際マネジメント研究科教授

島田 由紀



世界が深く分断され互いの「正しさ」が衝突し、絶え間ない紛争の報せに心が疲弊するこの時代に、私たちはどう生きるのかが問われています。ナチス独裁に抗い、命を落としたドイツ人神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーの「抵抗」は、単なる政治的運動ではなく、深い信仰に根ざした「責任ある行動」の結実でした。

『はじめてのボンヘッファー』は、その複雑な思想と激動の生涯をイラストとともに平易に紹介し、若い読者にも本質的な問いを投げかけます。彼が語った「愚かさ(Dummheit)」は、知識の欠如ではなく、権力や周囲の「空気」に同調し自ら考えることを放棄する心の状態を指し、SNSのアルゴリズムやAIの情報に主体性を奪われがちな現代の私たちへの切実な警告となります。

それでも彼の遺した言葉は絶望には終わらず、他者の苦しみに寄り添い「他者のために生きる」中に真の希望があると示しました。「地の塩、世の光」として歩むことを目指す本学での学びの中で、本質を見極め、勇気を持って一步を踏み出すための確かな道標として、この一冊を推薦します。